

歴代所長録

氏名	就任	離任
星野貞次	昭和16年3月27日	昭和20年9月29日
服部峻次郎	昭和20年9月30日	昭和24年6月10日
青柳安誠	昭和24年6月10日	昭和25年3月31日
近藤鋭矢	昭和25年3月31日	昭和29年3月31日
山本俊平	昭和29年4月1日	昭和29年10月20日
永井秀夫	昭和29年10月20日	昭和33年10月19日
植田三郎	昭和33年10月20日	昭和35年10月19日
内藤益一	昭和35年10月20日	昭和39年10月19日
長石忠三	昭和39年10月20日	昭和43年10月19日
辻周介	昭和43年10月20日	昭和47年10月19日
上坂一郎	昭和47年10月20日	昭和51年10月19日
前川暢夫	昭和51年10月20日	昭和55年10月19日
寺松孝	昭和55年10月20日	

ほし の てい じ
星 野 貞 次

明治18年 8月15日生



- 本籍地 東京都
- 現住所 藤沢市鶴沼松ヶ関4-18-22
(TEL0466-22-1918)
- 明39年 7月 第五高等学校卒業
- 明43年 11月 京都帝国大学医科大学卒業
- 大13年 3月 京都帝国大学教授就任
- 昭11年 12月 京都帝国大学評議員併任 (至昭13年 2月)
- 昭15年 6月 結核研究所開設準備実行委員長委嘱
- 昭16年 3月 京都帝国大学結核研究所長併任 (至昭20年 9月)
- 昭23年 11月 停年退官
- 昭23年 11月 京都大学名誉教授の称号授受

はつ とり しゆん じ ろう
服 部 峻 次 郎

明治23年 12月18日生



- 本籍地 兵庫県
- 現住所 京都市左京区田中東樋ノ口町44
(TEL781-3483)
- 大 3年 3月 第三高等学校三部卒業
- 大 7年 11月 京都帝国大学医科大学卒業
- 昭 6年 3月 京都帝国大学医学部教授就任
- 昭15年 6月 京都帝国大学結核研究所開設準備
実行委員委嘱
- 昭17年 10月 京都帝国大学結核研究所協議員委嘱
- 昭19年 12月 京都帝国大学評議員併任 (至昭20年 12月)
- 昭20年 9月 京都帝国大学結核研究所長事務取扱併任 (至同年 12月)
- 昭20年 12月 京都帝国大学(結核研究所長)併任 (至昭和24年 6月)
- 昭24年 5月 京都帝国大学評議員併任 (至昭28年 12月)
- 昭26年 4月 京都大学教授 (結核研究所) 併任
- 昭26年 11月 京都大学長併任 (至昭28年 12月)
- 昭28年 12月 停年退官
- 昭28年 12月 京都大学名誉教授の称号授受

あお やぎ やす まさ
青 柳 安 誠

明治32年5月23日生



本籍地 秋田県
 現住所 京都市伏見区深草石橋町1の8
 (TEL075-641-2361)

大9年6月 第七高等学校造士館卒業
 大13年6月 京都帝国大学医学部医学科卒業
 昭13年5月 京都帝国大学医学部教授就任
 昭24年6月 京都大学結核研究所長併任 (至昭25年3月)
 昭37年5月 停年退官
 昭37年5月 京都大学名誉教授の称号授受

こん どう えい し
近 藤 鋭 矢

明治33年5月16日生



本籍地 静岡県
 現住所 京都市左京区岡崎北御所町18
 (TEL075-771-4484)

大11年3月 第五高等学校理科学科卒業
 大15年3月 京都帝国大学医学部医学科卒業
 昭14年6月 京都帝国大学医学部教授就任
 昭25年3月 京都大学結核研究所長併任 (至昭29年3月)
 昭36年12月 京都大学医学部附属病院長就任
 (至昭38年1月)
 昭36年12月 京都大学評議員併任 (至昭38年5月)
 昭38年5月 停年退官
 昭38年5月 京都大学名誉教授の称号授受

京大結核胸部研創立40周年を迎えて

昭和25年4月から同29年3月までの4年間私は京大結核研究所長を勤めた。前任者の青柳安誠所長が就任後間もなく病気のため所長を罷めたいと申出られたので、結核研究所協議員会から、当時京大附属病院長であった井上硬教授と結研の併任教授であった私とが青柳所長の留任

説得の使者として青柳教授宅に派遣された。我々両人は青柳所長に辞意を翻えしてもらうように極力懇請したが、青柳所長の辞意が極めて固かったので、帰ってその旨結研協議員会に報告した。そこで協議員会はやむなく青柳所長の辞意を認め、その代りに使者に立った私に後任所長を是非引き受けてくれるようにという申し付けであった。昭和25年当時は我が国はまだ連合

軍の占領下であって、終戦後5年たったとは言え、人心の荒廃はなお甚だしく、一般世間にも学内にも、何でも暴露してやれという捨て鉢的な反抗意識が横溢して世上騒然とした時代であったので、私は結研所長就任には甚だ気が進まなかったが、結研協議員会のたつての要請にやむなく所長就任を受諾せざるを得なかった。そして、さて所長に就任して見ると難問は山積して、どこから手をつけて処理したらよいか困惑し、これは大変な所へ来てしまったものと途方にくれる想いであった。

戦中戦後を通じて診療用物資、研究用資材の不足は言語に絶するものがあり、結研では診療用物資としてはレントゲンフィルム、ガーゼ、綿花、レジンプロンベ等の入手に取り分け困却したので、私が所長になる以前から、他施設等の例に倣って便宜措置として特別経理という臨時の制度を設け、物品の現金買いを行って辛うじて診療、研究の間に合わせていた。しかし、私が気が付いた時には結研に於けるこの特別経理の運営には、その道の全くの素人であった私の目から見ても多大の無理、不合理が罷り通っているように思われたので、この制度は廃止されることになったが、その廃止に当たっても、その跡仕末のむつかしさは並み大抵のものではなかった。

又私が結研所長に就任した頃の結研経理の乱脈ぶりは全く目を覆わねばならぬほどで、その是正には大変な努力と忍耐と犠牲が必要であろうと予想された。私は当面の責任者として結研内部の積弊を一掃するためには、私自身重大な決意をせねばなるまいとまで考えたほどであったが、苦心惨憺その是正改善に懸命の努力を傾けた結果、昭和26年の会計検査に於て検査官から「これで結研の経理はガラス張りになりましたから、今後結研所長は安心して運営に当たって戴けるでしょう」と言われた時には、やっと

愁眉を開く思いがした。しかし其の陰では数名の部下職員が法の裁きを受けねばならなかったような不幸な事態もあった事は、私にとって忘れ得ぬ苦い思い出である。

昭和22、3年の頃であったろうか、結研は将来の移転予定地として市内伏見区横大路の変電所跡に土地を買収したが、ここは医学部臨床部門と遠く離れて孤立し、診療上、又研究上何かと不便が多かろうと思われたし、又この地域は今日でこそ巨椋池の埋立て、排水事業が進んで、周辺の開発には目を見張るものがあるが、昭和20年代のこの地は巨椋池一帯の広大な湿地帯に取り囲まれ、臨床部門を持った結核研究所をここに建設する事になれば、環境、立地条件からする不利や、研究遂行上の幾多の不便に直面する事になりはせぬかと憂慮された。しかし、この敷地の入手に就ては当時の服部結研所長や長石助教授等の多大の御苦勞があった事を知っていたので、この敷地を手離すことには深く躊躇せざるを得なかったが、上述のような理由で、遠い将来の事をあれこれ考えれば過去の行きがかりにこだわらぬ方がよかろうと意を決した。一方その頃本学防災研究所が適当な建設予定地を物色中であったので、防災研究所には打ってつけの此の敷地を防災研に譲り、代りに京大病院構内の現在地を結研敷地として譲り受ける事を良策と考え、服部京大総長の御了解と御援助を仰ぎ、医学部臨床教授会の好意ある同意承認を戴いた次第であった。そしてその後結研歴代所長を始め結研教官、職員各位の絶大な御努力によって、結研は急速に施設内容を充実し、京都大学結核胸部疾患研究所に発展して今日の隆昌を致すに至ったことはまことに御同慶の至りと思われる。結核胸部研創立40周年を迎えるに当り、昔日の苦難に満ちた時代を想起して今昔の感を深くする次第である。

やま もと とし ひら
山 本 俊 平

明治31年11月13日生



本籍地 静岡県
現住所 宇治市木幡御蔵山39の330 E街20号
(TEL0774-32-1223)
大9年7月 第七高等学校第三部卒業
大13年6月 京都帝国大学医学部医学科卒業
昭20年7月 京都帝国大学医学部教授就任
昭29年4月 京都大学結核研究所長併任 (至昭
29年10月)
昭29年4月 京都大学評議員併任 (至昭36年12
月15日)
昭36年11月 停年退官
昭39年7月 京都大学名誉教授の称号授受

創立四十周年に寄せて

私は結核研究所時代に第五代所長を勤めました。とは申せ就任は昭和29年4月1日から同年10月20日までの極めて短期間であります。当時の研究陣容は制度的には5部門となっておりますが、中心は創立当初からの岩井孝義、植田三郎の両教授と私の就任直前に昇任された長石忠三教授と私の退任の直前に昇任された内藤益一教授の四氏でありました。施設は医学部附属病院の東北隅、只今の医学部伝染病々棟の南側にあった木造2病棟が研究室並びに病棟に当てられ、外来には医学部耳鼻咽喉科教室の古い木

造建物が用いられました。現在では思いも及ばない貧弱なものであります。然し研究そのものは当時の学界の期待を背景に非常に活発であったことを記憶しております。皆様が熱心に勉強しておる姿が今でも脳裏に残っております。会議などのまとまりも迅速かつ立派でありました。

現在の外観、内容ともに供った結核胸部疾患研究所を見た時隔世の観と言う言葉がそのまま当てはまると思います。

京都大学結核胸部疾患研究所が益々発展することを願って止みません。

なが い ひで お
永 井 秀 夫

明治36年3月20日生



本籍地 愛知県

現住所 京都市左京区岡崎法勝寺町82
(TEL075-771-4991)

大13年3月 第八高等学校理科乙類卒業

昭3年3月 京都帝国大学医学部医学科卒業

昭26年8月 京都大学医学部教授就任

昭29年10月 京都大学教授結核研究所併任（至
昭41年3月31日）昭29年10月 京都大学結核研究所長併任（至昭
33年10月）昭29年10月 京都大学評議員併任（至昭33年10
月）

昭41年3月 停年退官

昭49年6月 京都大学名誉教授の称号授受

回 想

昭和29年（1954）10月前所長（兼）山本俊平教授の後を受けて就任し、昭和33年（1958）10月重任期間が終了した前後の回想。

1. 橋 渡 し

結核研究所創設以来長年に亘って臨床部門に重点が置かれ、5部門のうち4部門が診療にかかわっていた。昭和24年になって漸く病理学部門が設けられたものの、主任者の転出に伴って一時は空席に等しく、研究所の形態としてはやや片寄っていた。昭和29年人を得て充足され、既設の細菌血清学部門と共に基礎系が形成された。

昭和30年頃には終戦後の混乱期を脱して、各部門での業績も著るしく進展したので、学術講演会の形式のもとに研究所内外に発表することになり、昭和32年2月9日その第一回が開催された。結研の充実さを物語る意義深い出発であった。

研究の進展・拡大につれて一方では、部門名称がそぐわない向きもでてきた。すなわち、内部機構の調整、あるいは転換が問題となって、折にふれて討議された。しかし、維持と転換と

は交錯するのが世の常で、統一志向が成熟するまでには至らなかった。つまり、まだ過渡期の域に在るということであり、焦点課題として取組むのは尚早であるとみられた。当時、所内が一致して希求したのは施設の新営であった。したがって、任期の後半は施設建物の計画推進に意を注ぐことにした。

といっても、各部門がそれぞれ医学部附属病院構内に在る以上は、結研だけの独走は許されない。伊勢神宮のご遷宮のように参らないからである。それにしても、方針は確立して置く必要がある。すなわち、一時企図されたような医学部附属病院構内からの転出は考えない——予定地域は西部構内、と。もちろん、その譲渡は医学部附属病院の整備に俟つわけだから、かなりの長年月を要するであろうことは覚悟しなければならなかった。

もっとも、この方針は前所長時代からの流れでもあったが、目途がないまま歳月だけが過ぎゆく状態なので、時折は焦燥感を口にする向きもあった。受身の譏りは甘受しながらも、計画の再確認と推進の主張には努めた。

とにかく、方針は確立されえし、内部陣容も充実をみたので、医学部からの後見はも早や不要の時期に達したと思惟された。前所長各位、

医学部教授諸公の了承を得て、任期满了一カ月前には新しく所長選考規定を制定することができた。この橋渡しはその後の結研の完全自主に役立ったはずである。

2. 幻の青写真

話は遡るが、医学部附属病院の建物整備は依然として渋滞を続けていた。さればとて、手を拱いているわけにも参らない。心情的には心苦しく思いながらも、当時現存している皮膚・泌尿器科の地域を建設予定地と見立て、施設部に設営案を頼んだ。三階建三棟の計画案であった。未だ未公認の計画にもかかわらず、よく協力してくれたものである。この青写真は、結果的には、陽の目を見ることなく幻に終わったが、われわれ自身の意向を固めると共に、当時の人人に具体的に訴えるよすがになったことは確かである。

ところで、ここに一つの問題が持ち上った。ウイルス研究所が同じく西部構内に建物新営を企画しはじめたことである。結研も分散して確かに不便ではあったが、ウイルス研は間借り同然の状態が発足した。もともと、その創設に当

っては共同利用が謳われていただけに、可及的速やかな整備が要求される。研究棟だけという身軽さもあって、どうやら結研に優先する気配もうかがわれた。

ウイルス研設置委員の一人であっただけに、その要望はよく理解できた。ただし、建て方次第では予ての結研設営計画に大きく絡んでくる。この時も前の青写真がものを言い、結局、ウイルス研は裏手に計画され、大半の爾余の地積は結研に残されることになった。

結研退任後数年を経てから、漸く医学部附属病院の一部改修・新営が軌道にのりだした。昭和38年には外来棟が、昭和40年(1965)には第一病棟の峻功をみた。それに伴って西部構内の4科の外来部、病棟部の移転がおこなわれ、皮膚科・泌尿器科の教官室、研究室は西部薬局および小児科普通病舎に仮移転した。ここでやっと、予定地域にウイルス研とほとんど時を同じくして結核胸部疾患研究所の建物新営が実現しうることになった。

任期中まことに見栄えのしない年月であった。が、今しみじみと想起されるのは、その間に受けた関係各位の無量の温情である。

うえ だ さぶ ろう
植 田 三 郎

明治36年10月13日生



本籍地 大阪府

現住所 京都市北区小山西大野町31番地
(TEL075-492-4781)

大15年3月 山口高等学校卒業

昭4年3月 京都帝国大学医学部医学科卒業

昭16年3月 京都帝国大学医学部教授就任

昭33年10月 京都大学結核研究所長併任 (至昭35年10月)

昭33年10月 京都大学評議員併任 (至昭35年10月)

昭42年3月 停年退官

昭42年4月 京都大学名誉教授の称号授受

ないとうますかぢ
内藤益一 明治40年1月16日生



本籍地 京都府
 現住所 京都市左京区上高野北田町10の15
 (TEL075-711-0444)
 大15年3月 第三高等学校卒業
 昭5年3月 京都帝国大学医学部医学科卒業
 昭29年9月 京都大学教授(結核研究所) 就任
 昭35年10月 京都大学結核研究所長併任(至昭39年10月)
 昭35年10月 京都大学評議員併任(至昭39年10月)
 昭42年6月 京都大学結核胸部疾患研究所長事務代理併任し(昭42年6月7日至同年6月17日)
 昭42年6月 京都大学評議員併任(昭42年6月7日至同年6月17日)
 昭42年12月 京都大学結核胸部疾患研究所長事務代理併任(昭42年12月2日至同年12月19日)
 昭42年12月 京都大学評議員併任(昭42年12月2日至同年12月19日)
 昭43年9月 京都大学結核胸部疾患研究所長事務代理併任(昭43年9月28日至同年10月12日)
 昭45年3月 停年退官
 昭45年4月 京都大学名誉教授の称号授受

肺結核化学療法の適切な終了時期

長い間曖昧なままに放置されて来た此問題はINH-RFP-SM 併用初回化学療法6カ月余りで殆んど再発無しとする最近の研究によって終止符を打たれたかの感があった。然し其等の論文を詳細に読んで見ると、治療終了後10カ月の観察で菌再陽転が5.1%、3年余りで6.8%などと言う成績もある。私共も最近4例の失敗例を経験している。之等が少ないか多いかはしばらくおくとして、奇妙な点は、どの研究にも之以上はやってもやらなくても再発率は略一定、言い換えればやっても無駄だと言う一線が追求されていない事である。唯一つ4年以上の観察で再陽転皆無と言う素晴らしい結果があったが、残念ながら観察例が8例に過ぎなかった。

其処で此問題に就ての私の随想を述べたいと思う。果して御参考になるか自信はないが、御

一読を賜わらば幸甚である。

喀痰中結核菌は主として空洞内面或は気管支潰瘍面の上で充分な酵素の存在下に盛に増殖し、生体の防禦力の影響は少なく、一方薬の濃度もかなりの程度に達し得るので、INHやRFPの様な殺菌性の強い薬の併用が相当長期に亘れば、菌の絶滅に成功し、治療をやめても再度菌が出て来ない状態に達しても少しも不思議ではなく、空洞内面其者は再陽転としての意義は寧ろ少ないのではないかと思われる。然し空洞壁内を含めて大なり小なり細胞や線維にとりかこまれた菌や、細胞内の菌は第一に生体の防禦力の影響を強く受けており、第二に浸透する薬の濃度もまちまちであり、他の環境条件も一定でない為に、殺される菌もあり、種々の程度の耐性のつく菌もあり、全然つかない菌もあり、生体の防禦力と薬との協力作用により辛うじて発育の阻止されている菌もあり、防禦力だけで

発育を停止している菌もあろうと推定される。

さて化学療法施行中及終了後の喀痰中菌再陽転には次の場合が想定される。

第1の型は生体の防禦力と薬との協力作用により辛うじて発育を阻止されていた空洞内或は病巣内の菌が生体の防禦力の低下か薬の耐性獲得か或は其両方によって再び増殖を始めた場合で、之は治療中の菌再陽転である。諸家の報告には殆んどないが、私は2例経験している。以前の術式ではめずらしくなかったが、RFP・INHを含むものでは確かに少なくなっている。

第2の型は化学療法終了により、上述の状態の菌が薬から解放された為の増殖で、再陽転は治療終了に比較的近い時期に起る筈である。諸家の再陽転例の内早期の者の内には此型に属するものがあるかも知れない。但何カ月以内を此型と見るべきかに就ては現在の所私は正確な解答を用意していない。短期化学療法の主張は此数字に重点を置いておられる様に思われる。

第3の型は化学療法終了後、生体の防禦力のみによって発育を阻止されていた菌が其防禦力の低下により増殖した場合で、此菌の内には或程度耐性になった菌から全くの感性菌まで無数の段階があろうと推定される。再陽転が何時起るか予断を許さない事は、「ツ」反応陽転から何年何十年経ってからも再感染に因らない発病があり得ると言う、昔から良く知られた現象から見て当然の事ではあるけれども、後者の頻度は極めて低いに相違ない。然しそもそも結核が最初発病した事自体が防禦力の低下を主因としているだろうし、其防禦力の低下が6カ月余りで一般人なみに恢復するかどうか疑問が持たれる。然し其ならば治療終了後間も無い時期に再発が集中しそうなものなのに諸家の成績で

は必ず左様には見られない。之は全くの想像だが、防禦力の低下は間歇的に起るもので、最初の発病から年月が経つに連れて徐々に起りにくくなると仮定すれば、諸家の再発例の内3年余の者のあるのも納得がいくかと思われる。私の経験では術式に拘らないで見た化学療法後の再発は其期間が7~8年まで徐々に減り其後は略略一定となる様である。一方之を病巣の側から見れば、単なる「ツ」反応陽性者のかくれた病巣よりは一度発病した者の遺残病巣の方が、生体の防禦力の低下が比較的軽度でも悪化の危険性が高いと考えて当然であろう。化学療法が其危険性を何処まで低下させ得るかと言う処に併用術式と其継続期間の検討の目標があるべきではないかと思われるのである。即ち私は化学療法後の再発を検討する場合第3の型をこそ重要視すべきだと思うのである。

勿論以上は私の想像や仮定の上に立っての推論に過ぎないが、要は肺結核化学療法の適切な期間は菌再陽転が1~2年間で何%に止っていると云った現象で検索すべきでなく、之以上やっても無駄だと言う一線を短期から長期まで種種の治療群に就て終了後数年間の菌とX線像との観察に基いて決定すべきではないかと愚考するものである。然し此仕事は私の現在の仕事の場から考えて単なる空想に過ぎないし、代ってやってくれそうな、ひまな人もおりそうにない。随想として述べた所以である。

尚別な考え方として社会経済的に割切って5%や10%のおちこぼれは無視しても大多数の人の治療期間と医療費用とを少なくしようと言う意見がある。其は其なりに筋の通った主張だと思うが、之は医師一人一人の信条の問題であり、言うなれば宗旨のちがいであろう。

なが いし ちゆう ぞう
長 石 忠 三

明治40年12月10日生



本籍地 京都府
 現住所 高槻市南平台3-11-3
 (TEL0726-94-1464)

昭8年3月 京都帝国大学医学部医学科卒業
 昭28年3月 京都大学教授(結核研究所)就任
 昭34年9月 カリフォルニア大学客員教授
 昭37年12月 ワシントン大学客員教授
 昭39年10月 京都大学結核研究所長併任(至昭43年10月)(その間結核胸部疾患研究所長と改称)
 昭39年10月 京都大学評議員併任(至昭43年10月)
 昭46年3月 停年退官
 昭46年4月 京都大学名誉教授の称号授与
 昭47年4月 財団法人田附興風会医学研究所北野病院長
 昭52年3月 爾来同財団理事長をも兼任し現在に至る

京都大学結核胸部疾患研究所および同胸部外科部門40年の回顧

京都大学結核研究所(現結核胸部疾患研究所)は、昭和16年3月27日「結核の予防および治療に関する学理とその応用についての総合的研究機関」として設立され、6月16日から実務が開始された。正に大東亜戦争勃発の半年ばかり前のことである。

初代所長は、当時の医学部耳鼻咽喉科の故星野貞次教授(のちの京都大学名誉教授・元三重大学長)で、結核の専門家でなかったにも拘らず、結核研究所設立の必要性を提唱され、一方ならぬ熱意をもって7年間も努力された方である。当時亡国病だといわれていた結核の研究を日本の代表的な大学の一つである京都大学が何故やらぬのかというお気持ちで一杯だったからであろう。外科の青柳安誠教授(のちの京都大学名誉教授・関西電力病院名誉院長)とともに、私の大事な恩師である。

専任所員は、故岩井孝義・植田三郎の2教授と、檜林武・内藤益一・佐川一郎・長石忠三の

4助教授とであった。うち、最も長期の勤続者は私一人で、助教授12年、教授18年、昭和46年3月末の定年退官時で満30年になる。創設時の部門担当者の中では私が一番若かったからである。

以下「京都大学結核胸部疾患研究所および同胸部外科部門40年の回顧」と題し、とくに後者に重点を置いて思い出話を綴ってみるが、頁が限られているので、詳しくは、京都大学70周年史(昭和42年11月発行)の888~917頁や、胸部外科部門同門会誌第2号(昭和54年11月発行)の3~15頁を見て頂きたいと思う。また、「肺結核外科」に限っていうならば、京都大学胸部研病理学部門安平公夫教授が第50回日本結核病学会々長の時に編集された「結核」50巻、11号、日本結核病学会創立50周年記念特集号(昭和50年12月発行)を見て頂くとよいと思う。

◇創設時から敗戦時まで

日支事変の終わり頃に設立された関係で、戦争に無関係な建物の新築は許されなかったので、外来、病棟、研究室とも、耳鼻科が新館へ移ったあとの古い木造1階建を改修して発足した。

昭和56年度で丁度満40年になる。私の所長時代に、新館が出来て現在地へ移り、研究所名が結核研究所（結研）から結核胸部疾患研究所（胸部研）へと、部門名が外科から胸部外科へと変更されてからでも早や15年～16年になる。

外科部門は、研究所の創設当初から公認部門として設けられていたが、当時のわが国では、肺結核外科はまだほとんど行なわれていなかったもので、教授の席はまだ設けられておらず、医学部耳鼻科の講師で頭頸部の手術が出来、しかも喉頭結核の研究を行っていた私が、結研の助教授に昇格して、胸部外科の開拓に当ることになった。胸部外科といっても、当時の差し当りの研究対象は肺結核であった。

星野先生は、耳鼻科の助教授室の隣に私の助教授室を新たに造って下さり、当時の耳鼻科の第4研究室をも私どもに貸して下さった。

創設時、私は33才で、耳鼻科から昭和15年卒の島田茂治君を私の助手としてつけて下さった。だから、私どもの外科は、彼と私とのたった二人で始められたわけである。因みに、昭和46年3月末の私の定年退官時には、200名余の人材が育っている。

私どもは、昭和16年から5カ年間、医学部第2外科の青柳安誠教授（現名誉教授）のもとへ学内留学をさせて頂いた。腹部外科を中心とする一般外科は先生御自身の手術につけて直接手をとって教えて下さり、肺結核外科については肋骨切除のやり方だけを教えて下さり、あとの開拓はすべて私に一任して下さった。

私は、先生の御期待に沿うべく極力努力をし、新たな試みや研究の進展経過について逐一御報告申し上げていたが、先生のように御自身でやろうと思っておられた問題を、当時の私のようなまだ海のものとも山のものとも判らぬ若い門下生に一任し、その後長年にわたり大所高所から温く見守り、蔭になり日向になりバックアップするといったことは、いづくして仲々出来ぬことである。人の上に立つ一人の将としての、また一人の教育者としての先生の立派な一面だといえよう。

かくして、戦時中の4年間は、主として一般

外科の習得と、外科的肺虚脱療法、とくに胸廓成形術、横隔膜神経捻除術、平庄開胸下胸膜癒着剝離術、Jacobaeusの胸膜癒着焼切術の習練とに費やされた。青柳先生との合作で、Monaldiの空洞吸引療法後の遺残空洞を切開して有茎性筋肉弁を充填したのが、この時代におけるただ一つの新たな試みであった。この仕事は私どもの胸部外科における切開排膿療法の研究の端緒となっている。のちに、私どもの空洞形成術(Cavernoplasty)に発展したものである。

当時は、余りにも、物なく、人なく、あるのはただ強烈な使命感のみといった時代であった。しかし、何事であれ最も大事なものは現在でも、物よりは人、それも個人の使命感や責任感であるのに変りはない。この時代の入局者は、2カ月位で逐次軍医として出征したが、敗戦後は私どもの許へ復帰し、学内外でそれぞれ重責を果しておられる。

◇昭和20年代

前期：耳鼻科の教授が星野貞次先生から後藤光治先生に引き継がれたのを機会に、長年の御好意を謝し、5年間お借りしていた助教授室や研究室を耳鼻科へお返しし、結研内に新たに外科の研究室や手術室を造って頂き、つぎつぎと若い卒業生を迎え、私どもの外科に1研、3研、5研と称する三つの研究グループを新たに編成した。結研に研究室や手術室を造って下さったのは、当時の所長服部峻治郎教授（のちの京都大学総長）であった。

1研ではペニシリウムの培養をも含めた微生物学的研究や、生化学的研究その他が、3研では、肺機能の病態生理学的研究が、5研では肺のあらゆる類いの形態学的研究が主として行なわれ、それらの上に胸部外科臨床を築く方針がとられるようになった。この三つの研究グループは私の定年退官近くまで存続し、1研からは故久保克行・寺松孝の両教授、3研からは香川輝正・佐川弥之助の両教授、5研からは岡田慶夫教授、を初め3グループとも多くの俊秀が輩出している。同門会誌の表紙の3匹の乃保里鮎はこの三つの研究グループを象徴したもので、岡田慶夫教授の御尊父の山本紅雲画伯の御好意

により画かれたものである。

また、この時代（昭和21～2年）には、私ども（長石忠三・寺松孝ら）と京都大学理学部有機化学教室（故野津龍三郎教授・故渡辺熙助手（のちの甲南大学理学部化学科教授）らとの協力研究、すなわち「結核化学療法剤の合成とその医学的応用に関する研究」や、私ども（長石忠三・辻周介・美濃口玄各現名誉教授）と京都大学工学部繊維化学教室（現在の高分子化学教室）の桜田一郎現名誉教授関係との協力研究、すなわち「合成樹脂の医学的応用の研究」が始められている。これらの二つは正に近年やかましくいわれている「学際研究 Interdisciplinary Research」の走りであった。医・理間または医・工間の協力研究であったからである。まだ若かった私どもは、戦時中から始めた胸部外科開拓の研究と、以上の二つの学際研究とに情熱を注ぐことにより、敗戦後1、2年で、当時まだ国内に漲っていたどうしようもない精神的な虚脱からいち早く立ち直ることが出来たのである。

因みに、後者の一つ、すなわち、私どもが世界で初めて開発した「胸膜外合成樹脂球充填術」は、細菌血清学部門の植田三郎教授（のちの名誉教授）の特別講演「結核菌の発育環」とともに、昭和24年春の日本結核病学会における特別講演として採り上げられている。

狭くて汚い研究室でのことではあったが、みんな張り切っていて、苦労を苦労とも思わぬ心楽しい時代であった。「明日のために今日を生きる」といったことが意識されずに自然に身についていたよき時代であった。

また、その頃（昭和23年）から関東と歩調を合せ、肺切除術についても検討し始め、敗戦後一時的に中断していた空洞切開術の研究をも再開している。

後期：この期の初めに研究所の創立10周年を迎え一同張り切っていたが、当時の某事務長による思いがけぬ不祥事が暴露され、私どもはこれからという大事な時に正に出鼻を挫かれた思いであった。

しかし、私どもは、これにめげず戦時中に芽生えた苗木を育て、やがて来るべき開花の時に

備えてあらゆる準備に明け暮れた。

具体的には、前期におけるペニシリウムの培養、ペニシリンやストレプトマイシンの応用、輸血・輸液の普及、肺構造や呼吸循環生理の研究などに加え、後期における気管内挿管麻酔の導入を機に、肺結核外科の新しい術式を案出したり、肺癌外科の研究を進めたり、両者をあらゆる観点から臨床的ならびに基礎的に検討したりした。

この時代には、肺葉切除術、肺部分切除術、肺区域切除術、骨膜外充填術、空洞切開一次的閉鎖術、乾酪巣の切開排膿療法などをも含め、外科的肺虚脱療法、肺切除療法および切開排膿療法のすべてについて大筋を通し得たように思う。人工気胸術の再検討をも行ない、その施行を中止すべきことを提唱したりもした。

肺の形態学的ならびに生理学的研究も、この年代の後期から軌道に乗っている。

昭和28年3月、私は教授に昇格し、結研の外科はこれにより初めて完全部門になった。当時の所長は、医学部整形外科の近藤鋭矢教授（現名誉教授・静岡労災病院名誉院長・京都の現整形外科園長）で、外科に引き続き、その翌年と翌々年とに逐次内科や小児科の教授の席を設け、三つあった不完全部門をすべて完全部門に変え、結研の将来の発展に大きく貢献されている。

◇昭和30年代

昭和30年代は、20年代に伸びた樹木に小さいながらも色とりどりの花が咲き、結研の外科が国際的にも発展し始めた頃である。

ことに、昭和30年度は、私に第8回日本胸部外科学会の会長、第30回日本結核病学会の特別講演「空洞切開術を中心とする肺結核の切開排膿療法」、第19回日本循環器学会の宿題報告「肺循環、静脈血混合を中心として」などが一度に当り、これに加えて同年の日本医学会総会の特別講演者として御推薦した恩師青柳安誠先生の御講演「肺結核の外科的療法」の準備をもお引き受けした殊の外忙しい年であった。

ともあれ、昭和30年代は、昭和20年代に端を発した諸研究に関連して、全国的な諸学会での宿題報告、特別講演、シンポジウムなどが私ど

もの外科につきつぎと毎年のように当り、慌しく時が過ぎた時代であった。

学内のスタッフは勿論、他大学、諸病院、諸療養所などへ赴任した人達も、ひとかどの専門家に育ち、研究面でも微に入り細にわたる研究が広く行なわれるようになった。

また、この年代に、私どもの外科は、肺結核外科から肺癌外科、さらには胸部外科一般へと移行している。心臓血管外科は、学内では行なわなかったが、学外または国外で育て、現在ではかなりのレベルのものに出来上っている。

当時の研究所の旗印は、「結核研究所」であったし、恩師青柳先生の御教室でも曲りなりにも心外科が始められていたし、それに、喀痰中に結核菌を排出する開放性肺結核患者を収容中の病棟へ乳幼児を含む心疾患患者を収容するわけに行かなかったからである。京都大学の医学畑全体のことをも考えてのことであり、この考え方は、当時としては正しかったと思うが、私どもの胸部外科のこの領域への将来の発展を大きく阻害する結果となっている。この種の場合、どのように判断するのが正しいか、なかなか難しい問題である。

ともあれ、私ども関係の心血管外科は、三重大学胸部外科（元久保克行教授、現草川実教授）、関西医科大学胸部外科（香川輝正教授）、市立静岡病院（秋山文弥部長）、国療岐阜病院（小林君美現院長）、国療静澄病院（望月立夫院長）、神戸市立中央市民病院（吉栖正之副院長・庄村東洋部長）、高知市民病院（宮本好博科長）その他でそれぞれ軌道に乗っている。

また、この時代の論文発表は、臨床から基礎へと多岐にわたっており、長年にわたり詳しく検討され比較的安定したデータが揃ったものは、その頃に何冊もの単行本として出版されるようになっていく。

長石忠三・長沢直幸・山下政行・岡田慶夫・稲葉宣雄著：「肺その構造 上,下2巻」(医学書院)、林義春著：「肺区域の選択的造影法とその応用」(医学書院)、寺松孝他胸部外科編集「重症肺結核の治療」(金芳堂)、などがそれである。うち、林義春著のものは、20年後に、長

石忠三校閲・林義春・人見滋樹・玉田二郎共著：「肺区域の気管支造影」(医学書院)として改訂され再刊されている。

国際発展の端緒となったのは、昭和33年に東京で開かれた第5回国際胸部疾患会議 Vth International Congress on Diseases of the Chest である。この会議で知己を得た私は、翌年34年9月、University of California San Francisco から Visiting Professor として1年間招聘された。招待者の Professor Seymour M. Farber は胸部内科の教授であったので、私は official には彼と同じ Department of Internal Medicine に所属していた。San Francisco 滞在中、私は教授達から同僚扱いを受け、任期満了後の日本への帰途、欧米各国の視察旅行に当り、San Francisco の友人達の紹介により世界の第一線の教授達を多数友人、知己とする結果となっている。胸部の内、外科の人達のほかに、解剖学、病理学、呼吸循環生理学などの著名な基礎医学者との交わりも深くなっているのは、私どもの研究テーマを介してのことである。

昭和37年10月、私は Deutsche Tuberkulose Gesellschaft (現 Deutsche Gesellschaft für Lungenkrankheiten und Tuberkulose) から特別講演に招かれ、その直後に、同学会名誉会員や、Zsch. f. Tuberkulose und Erkrankungen d. Thoraxorgane の Herausgeber の一人に推薦されている。何れも Prof. Hans Rink の御好意によるものと思われる。

また、その帰途欧米諸国で講演旅行に招かれ、短期間ではあったが University of Washington Department of Surgery でも Visiting Professor に任命されている。これは故 Professor Henry Harkins や Professor Merendino の御好意によるものである。

その後は連鎖反応のようになり、毎年のように、欧米、中南米、東南アジア、東欧共産圏の諸国、のちには中華人民共和国などへ講演に招かれ、私ども関係の主だった仕事を逐次紹介するとともに、若い同門会員をつぎつぎと米国や独乙の友人達の許へ留学させる手掛りとなっている。

昭和30年代は、若い人達の赴任先が療養所から大学や一般病院へと移行した時代でもある。この年代には、私どもをあてにした呼吸器科、第2外科、胸部外科などがあちらこちらに新たに設けられている。

また、この年代からは、独立独歩で地域医療に邁進する人達も増えて参り、胸部疾患の本当の意味での専門家に育った人達が多くなって来たためか、患者の信用を得て大きく伸びつつある人達が少なくない。その人達の中に医師としての道を踏み誤った人がみかけられないのを何より嬉しく思っている。

◇昭和40年度

昭和39年10月から43年10月までの4年間、私は結研の、ついで胸部研の所長を務め、その任期の後半から大学紛争に巻き込まれた。そして、その余燼が燻っているうちに、46年3月末定年退官することになった。

したがって、40年代の前半は、これら二つの思い出に尽きる。

その間、新たな研究や人の養成が自然疎かになったことは否めない。止むを得なかったとはいえ、私としては関係の若い諸君に相済まなく思っている。

紛争発生後アクティビティーが落ちたとはいえ、とにかくにも定年退官時まで何とかやることが出来たのは、寺松孝助教授（現胸部外科教授、胸部研所長）、佐川弥之助講師（現臨床肺生理学教授・胸部研病院長）、岡田慶夫講師（現滋賀医大第2外科教授）、池田貞雄講師（京都桂病院呼吸器センター長）や、助手の人達の努力と協力によるものである。紛争発生後私の定年退官時までの3年半ばかりの間に、20余りのシンポジウムが担当されているのは、これを物語って余りあるものであろう。

その間、長石忠三校閲・岡田慶夫著：「肺癌」（医学書院）、長石忠三校閲・池田貞雄・船津武志・人見滋樹・甲斐隆義共著：「胸部の異常陰影」（金芳堂）、岡田慶夫・赤嶺安貞著：「呼吸器疾患とその微細構造」（医学書院）、Nagaishi, C. : Functional Anatomy and Histology of the Lung（英文日本版医学書院、米国版 University

Park Press, Baltimore & London）などがそれぞれ3年余かかって執筆されており、私の退官の年またはその翌年に出版されている。また、日本で発行された私どもの英文書 The Cavernostomy and Other Local Treatments for Pulmonary Tuberculosis（医学書院）は、4年後の昭和47年に私の友人 Professor L. K. Bogush の命により Woman Doctor Gromova の手で、ロシア語に翻訳され、Moscow から出版されている。私どもの The Cavernoplasty の術式がソ連では、CHUDO（チューダと読む）の術式という愛称で呼ばれ、広く行なわれていると聞いて驚いている。

また、私の所長時代には、幸い研究所の5階建の新築が出来、従来4カ所に分れていた研究所を1カ所に纏めることが出来た。また1部門（細胞化学部）、2診療科の新設、病床増などにより、教授1、助教授1、講師2、助手8、看護婦その他10の定員増が認められ、曲りなりにも中央検査室やコバルト室が設置された。そして、研究所の臨床は初めて附属病院の形をとることになり、これに伴い病院長の席が新たに設けられた。

前述のように、研究所名が結核研究所から結核胸部疾患研究所へと、外科学部門が胸部外科学部門へと改称されたのもこの時である。

研究所の協議員会制が廃止され、教授会制に変更され、医学部と大学院教授会で結ばれるようになったのもその頃のことである。その後は学位審査もその場で行なわれるようになっている。

かねて申請中のもう1部門（臨床肺生理学部）の新設は、私の所長時代すでに次年度にパスするところまで行っていたが、大学紛争の飛ばちりを受けて予算概算を一旦引っ込めざるを得なくなった。しかし、その後の反省もあって私の定年退官のすぐ前の年に再び予算概算に出されることになった。私は、当時はもう所長ではなかったが、研究所への最後の御奉公のつもりで、その通過にあらゆる努力を重ねた。大蔵省の内示でパスしたことを知った時、私自身定年退官を目前にして何よりのよい餞別を貰っ

たような気持ちでした。これで研究所は臨床4部門、基礎3部門、計7部門となったわけである。近い将来にせめて10部門を目指して努力して頂きたいと思う。

胸部外科部門の私の後任教授の選考や、新設された臨床肺生理学部門の初代教授の選考のことであるが、前者は私の在任中に、後者は退官後間もなく行なわれた。私は候補者については何らの個人的意見をも述べなかった。当時の研究所長の辻周介教授に「大事な人事のこと故、strengによく審議して頂きたい」と申し入れるに止め、あとは教授会に一任した。

私としては、何人もの諸君を将来指導的立場に立ち得るように心して育てたつもりであったし、私が横から口を挟んだりして、その誰かの心に自ら傷をつけてはいけないとも思ったからである。strengによく審議して、よりどりみどり最適者を選考して貰えばそれでよいといった考え方であった。尤も新設の臨床肺生理学部門の場合には、本来佐川弥之助講師の長年の業績が評価されて出来たも同然な部門であるから、教授会に良識がありさえすれば、当然落ち着くべきところへ落ち着くものと確信していたのが本当である。

教授選考の結果、胸部外科部門の私のあとは、私の助教授であった寺松孝教授により継がれ、臨床肺生理学部門の初代教授は私の講師であった佐川弥之助教授に決定された。

また、私の退官後は、私が現職教授であった頃には、まだ教養課程へも入学しておられなかった若い諸君がつぎつぎと入局されており、今後は私の時代とは一味違った形で発展するものと期待される。

私や諸先輩の労苦をよく理解し、これを踏み台にしてさらに大きく伸びて貰いさえすればそれでよいのである。

話が若干前に戻るが、昭和44年度には、私は第9回日本胸部疾患学会の会長と、Ist Asia Pacific Congress on Diseases of the Chest (APCDC) の会長とを同時に引き受けなければならぬはめになり、大学紛争のピークの時であっただけに、一方ならぬ苦勞をした。

前者は内藤益一教授（現名誉教授）が会長をされた第44回日本結核病学会総会と日を前後して同じ会場で開催されたものであり、後者は中華民国、韓国、香港、フィリッピン、タイ国その他の東南アジアの諸国からの日本への要請に応じ、ACCP 日本支部、のちの国際胸部医学会日本支部がその組織作りと第1回総会の開催とを引き受け、私に白羽の矢が立てられたものである。

医学部の正門前に「帝国主義的海外侵略の尖兵第1回アジア太平洋胸部疾患会議粉砕全闘闘」なる大きな立看板が立てられたのも、遠い思い出の一つとなっている。何かにつけて文句をつけるその頃の風潮からであったろうが、その時には思いもかけぬ飛んだことを考えるものだ、あきれた気持ちであった。

その2年後の昭和46年3月末、私は定年退官し、翌4月1日付で京都大学名誉教授の称号を授与された。

45年の半ば頃から定年退官時を挟む46年12月末までの1カ年半は、財団法人和風会医学研究所加茂川病院の解散・閉鎖の後始末を委託され、大学紛争の時とは一風違った激しい闘争に巻き込まれ、家族ぐるみ一方ならぬ鬱陶しい1年半を送らざるを得なかった。北野病院と同様な京都大学医学部と同結核胸部疾患研究所との持つ文部省所轄の財団研究所病院のことであった。頑張っって何とか切り抜けたが、母校に近い鴨川辺りの得難い土地を失なったことは大きな痛手であった。今でも、惜しくてならない。「従業員諸君にもう少し良識があったならなあ」と思うこと頻りである。ともあれ、この事件を介し、菊池武彦・近藤鋭矢両名誉教授を初め御関係の方々と心を通じ合い、ともどもに苦勞を分かち合ったことは、一つの得難い御縁というものであろう。

◇昭和50年代

翌47年4月1日から私は、前院長荒木千里京都大学名誉教授のあとを継いで、大阪の財団法人田附興風会医学研究所北野病院へ赴任し、4、5年前からはさらに同財団の理事長をも兼任して現在に至っている。

学内では、前述のように、寺松・佐川両教授が私のあとを継いで下さっており、この関係から、50年代の研究所内部の歴史にはあまり触れないことにする。

ただ1, 2申し上げて置きたいのは、私が定年退官後、昭和50年に大阪で第16回日本肺癌学会の会長を、また、昭和53年に京都で XIIIth World Congress on Diseases of the Chest sponsored by the International Academy of Chest Physicians and Surgeons (IACPS) affiliated with American College of Chest Physicians (ACCP) の Vice Chairman of the Organizing Committee と Secretary General とを務めた時のことである。

母校から一人離れて大阪にあり、重責を帯びながら準備や運営については手足を挽がれたも同然な形であった私を全面的にバックアップし、それら二つの学会をそれぞれ成功させて下さった胸部研の胸部外科を初めとする各部門の方々の御好意や御協力に対し、この機会をかりて重ねて厚く感謝の意を表したいと思う。

また、昭和50年度は、内科第2部門の辻周介教授（現名誉教授）が第16回日本胸部疾患学会の会長を、病理学部門の安平公夫教授が第50回日本結核病学会の会長を務められた年にも当る。お二人ともに、それぞれの特別講演者に私関係の寺松・岡田両教授を選んで下さり、もう第1線ではなくなっていた私をそれぞれの座長に指名して下さったのは、大学紛争のあとのことであっただけに、私にとっては心嬉しいことであった。

ここで、もう一つお礼を心から書き残して置かねばならぬことがある。私が定年退官後、日本胸部外科学会、日本胸部疾患学会、日本肺癌学会、日本癌治療学会、国際胸部医学会日本支部会などの名誉会員や、日本外科学会の特別会員に推薦され、現職中に、Deutsche Gesellschaft für Lungenkrankheiten und Tuberkulose を初めとする欧米諸国の6学会の名誉会員や、American College of Chest Physicians (ACCP) の Governor（4年前からは寺松孝教授に引き継いで貰っているが）の一人に推薦されている

のは、私ども関係の諸君の長年にわたる精進の賜である。Forlanini の金メダルとそのDiploma、武田医学賞その他を授与されているのもこれと同様である。

諸君とともに頂いたものと思い、ここに一言書き添えて、感謝の意を表する次第である。

その他、私は、米国の ACCP の機関誌「Chest」と「Experimental Medicine and Surgery」との、また独乙の「Zschr. für Tuberkulose und d. Erkrankungen d. Brustorgane」と「Acta Cardiologica」との Foreign Editor または Herausgeber を長年委嘱されているが、これまた諸君の長年の御努力の賜であろう。

昭和50年代の胸部研の現状について現職教授の時代と明らかに違って見えるのは、臨床各部門間の連携がよりよくなり、病棟の分け方が、昔と違って、各部門別ないし各階別ではなくなり、結核病棟と一般胸部疾患病棟とに再区分され、後者が各科総合病棟に編成変えされていることである。私にとっては我が意を得たりの感が強い。

このような行き方が本当だということは、研究所の設立当初初代所長の星野貞次先生がよくいられたことであり、しかも仲々うまく行かなかったことだからである。

一方、京都桂病院の「呼吸器センター」では、病棟が単に総合病棟として編成されているだけではなしに、本当の意味での呼吸器科専門医が育ち易いような形に運営されている。

これは、私ども関係の池田貞雄センター長・船津武志・畠中陸郎・松原義人らの諸君の自発的な企図によるものであるが、同じ釜の飯を食って育った山下政行会長、矢崎次郎院長代理らを初め桂病院のスタッフの方々の深い御理解や御支援によるものと感謝に堪えない。

私がかねてから桂病院呼吸器センターのこの行き方を高く評価していたが、この形が正しいことは、池田貞雄・船津武志・人見滋樹・甲斐隆義らの諸君により共同執筆された「胸部の異常陰影」なる600余頁もの大部の著書が、過去10カ年間に版を重ね、すでに6,000部出ており、近くさらにその改訂版の出版が予定されている

ことからみても、立証されていることと思う。

この書の校閲者は私ということになっているが、私は依頼されて序文を書いただけで、その企画にはタッチしていない。何でも大学紛争の頃に毎夜のように集まって協議し、3年かかって仕上げられたものだそうである。私の定年退官時に私に捧げて下さる予定だったと序文に書いてあるのをみて、ほろりとしたことを覚えている。あの大学紛争中によくやったと褒め称えたい気持であった。

これに引き続き、畠中陸郎・船津武志・松原義人・池田貞雄らの諸君により最近「呼吸器外科手術書」が出されている。本書もまた同じ協力態勢による成果である。

また、私の退官後、結核胸部疾患研究所から学生への講義用の呼吸器病学が、つづいて大島駿作・佐川弥之助・寺松孝・前川暢夫の諸教授らの共著：「呼吸器病学」(金芳堂)なる教科書がまた最近では、前川結核胸部疾患研究所長監修、各臨床教授ら、および関係各位により、米国の Dr. Frank H. Netter の著書 The Ciba Collection of Medical Illustrations Vol.7. Respiratory System (Ciba Geigy) の翻訳書が出版されているが、これまた各部門の互いの協力の産物であり、真に立派なことである。私は胸部研の出身者の一人としてともどもに喜びたい気持である。

また、寺松孝教授が昭和57年度の日本肺癌学会の会長に、前川暢夫教授・寺松孝教授・佐川弥之助教授がそれぞれ昭和58年度の日本結核病

学会、日本胸部外科学会、日本胸部疾患学会の会長に決定されているのも嬉しいことで、喜びに堪えない。これで「すっかり代が変わった」というのが実感である。

しかし、「好事魔多し」ともいう。折角万事がうまく行っている今日、つまらぬことで躓かぬよう、責任者の方々は仲よく手を携えてやって頂きたいと、心から願っている。

以上、臨床部門の話が主になったが、仄聞するところによると、基礎部門でもそれぞれユニークな秀れた業績があがりつつあることは御同慶の至りである。

ただ、もし率直にいうことが許されるならば、研究所の旗印をも念頭に置かれ、病理学部門のように、各自の研究を研究所の旗印と結びつける努力をも併せして頂ければどんなによいかと思う。正に鬼に金棒だからである。

研究の自由は自由として、特定の旗印を持つ研究所では、臨床部門はもちろんのこと、基礎部門においても、当然のこととして主なる研究課題を研究所の旗印に結びつけることが要請されており、これを媒にして基礎部門と臨床部門との連携が生れるならば、研究所のさらに大きな発展に繋がるものと思う。

以上のような基本的な考え方で研究を進める過程で、研究というものの本質上、思わぬ時に思わぬ方向に思わぬ発展をしてしまうことはよくあることであり、それはそれで望ましい行き方だと思うが、どうであろうか(昭和56年9月)。

つじ
辻しゅう すけ
周 介

明治45年3月8日生



本籍地 京都府
現住所 京都市左京区田中春菜町9の5
(TEL075-781-6919)

昭6年3月 第三高等学校理科乙類卒業
昭10年3月 京都帝国大学医学部医学科卒業
昭32年10月 京都大学教授（結核研究所）就任
昭43年10月 京都大学結核胸部疾患研究所長併任（至47年10月）
昭43年10月 京都大学評議員併任（至昭47年10月）
昭50年4月 停年退官
昭50年4月 京都大学名誉教授の称号授受

過ぎし方を振りかえって

研究所創立後四十年を振りかえって（尤も私は昭和二十年からだから正味は三十六年であるが）みると、時の流れと共に幾多の変遷があり、それらは多くは研究所の発展につながるものだろうが、中にはむしろ後退の面も含まれるかも知れない。それらを思いつくまに三つ程述べてみたい。

先づ研究所の体質の問題がある。体質は制度によって表わされると思う。研究所設立に多大の尽力を払われた初代所長星野貞治先生は、研究所は学部とちがって兎に角自由な研究専一にすべきであると考え、このためには当時巷間にも知られた学部講座制の封建制を忌避された。教授助教授よりなる所員制がとられ、研究部門はあるが、研究員はそれらの部門間を自由に交流出来た。例えば岩井孝義教授の下に入局した研究員の多くが私の指導で研究をつづけたことに何の不自然さも感じられなかった。併し研究所の運営は、研究所協議員会が実権を握り人事等の重要事項はそこで決せられた。協議員会は、医学部臨床教授全員と研究所の二教授より成り、我々助教授所員は関係ない。所員会議は一応の要望を教授を通じて協議員会に表示することは

出来ても何の決定権もないのである。ここに恐らく星野先生の意に満たない医学部の封建制の余波が及んでいた。研究所は医学部の附属物であり勝手な真似はさせないという意向があらわであった。

医学部教授達の年令が我々に近付いて来ると共にこの傾向は緩和され昭和三十七年頃には、研究所教授会と自称するものが万事を取りしきり、協議員会は名目的に存在するだけとなった。すべて研究所教授会の意向に従ってくれるようになった。昭和四十二年には、正式に教授会が認められ協議員会は廃止された。ここに初めて研究所が独立したわけであるが、その反面研究所にも講座制に近い形態が出来て、研究部門間の隔絶がはっきりし、所員制度の頃のような潤達性がなくなったのも事実である。

大学紛争の波が研究所にも及ぶに至って、私の所長時代に教官会議及び研究所運営審議会を作り封建制の緩和をはかった。教官会議はかつての所員会議に類するもので、決定権は教授会にあるが、いろんな研究所管理運営に関する案を時には政治的な配慮も加えて論議することが出来る。運営審議会は一般職員の意見を汲み取る為のもので、勿論決定権は教授会に属する。かくて、私の気持では、創立当初の研究所の体

質に幾分でも里帰りすることが出来ればと思ったのである。現在も之等の制度は維持せられているようで、必ずしも紛争時のドサクサまぎれに一時を糊塗するためのものではなかったことが判る。但し之等の制度が講座制の緩和に事実役立っているかどうかは知らない。

次に、建物の問題がある。創立以来古い医学部の建物を使わせてもらっていたので、結研の病舎は日本一汚いがその割に患者の質も量も良いとは当時自慢にもならない評判であった。既に三十年代の初めから新築又は移転の話が出ていた。勿論新築などとて話にならないので、移転ということになったが、いろいろ物色の末中書島に決定した。今日京阪電車に乗って中書島附近の古い発電所の建物を眺めると（現在防災研究所）、よくもこんな所へ移転しなかったものとつくづく思う。既に決定した移転計画を御破算にして下さった近藤鋭矢所長のお陰である。其後も累代所長の最大の関心事であったが、結局現在のような近代的な研究所の形を取り得たのは、当時の医学部教授会の理解にもよるが、そこまで実現に持って来た長石忠三所長の絶大な努力の賜といってよい。遂には文部省の役人

が長石さんの顔を見ると逃げだしたと言われる位執拗に陳情に通われたのである。今また増築の話もスムーズに進んでいる由であるが、今昔の感に耐えない。

最後に研究所の名称が変わった。このことは研究の主題が変わったことを意味する。結核の研究以外に他の胸部疾患の研究に及ぼうというわけであろう。たしかに、結核は臨床的には殆ど解決済みのものである。併し結核菌の特性を利用した基礎研究はまだまだ後を絶たないむしろ盛んになっている。近代免疫学の基礎に結核菌があると云ってよい位である。実験結核研究会という集まりが私的ではあるが全日本的に益々盛んになっている。

結核以外の胸部疾患というと、肺癌は別として私には耳新しいものが多い。ただ一つの国立研究所が研究主題として取上げるに足るものがあるだろうか。現在肺癌が統一課題として取上げられているように私には感じられるが、之は之で正しいと思う。

研究所百年のことを思えば、もう少し大きい名前にした方がよかったかとも思える。但し当時は随分この事で論議を重ねた結果である。

うえ さか いち ろう
上 坂 一 郎

大正2年4月15日生



本籍地 京都府

現住所 京都市左京区下鴨北園町80-3
(TEL075-781-2101)

昭11年3月 富山高等学校卒業

昭16年12月 京都帝国大学医学部医学科卒業

昭42年5月 京都大学教授（結核研究所）就任

昭47年10月 京都大学結核胸部疾患研究所長併任（至昭51年10月）

昭47年10月 京都大学評議員併任（至昭51年10月）

昭52年4月 停年退官

昭52年4月 京都大学名誉教授の称号授受

40年前のことども

当研究所の学術講演会は近頃は毎年1回、1月末に開かれるのが恒例となっている。今年（昭和57年）も1月30日に京大会館で気鋭の士によって研究の成果が発表される予定とか。一体この講演会は何時から始められたものだろうか。実は当研究所が設置される2年も前、昭和14年10月22日に楽友会館で開かれた京大結核研究会の第一回講演会をその嚆矢とするという点ではあまり異論がないであろう。とは言っても筆者は当時、医学部の2回生で、この講演会に出席した訳ではなかったが、結核が国民的な最重要課題であるということは医学生の間でもよく認識され、強い関心が持たれていたことは当然であった。

越えて昭和16年、京大に結核研究所が設置された時、既に4回生になっていた我々のクラスの雑誌部委員は初代所長の星野先生を訪ね、その談話の要旨を芝蘭会雑誌第15号（昭和16年6月発行）に発表している。その中で星野先生は「結核の研究こそは従来のやり方、即ち一つの教室が一つの城郭に立てこもってやる縦の方法以外に、医学の各学科は勿論、理、工、農などの自然科学の各科や、更には法、文、経などの人文、社会科学までも横に連絡して進んで行くやり方が最も要望される」と言っている。これは当時としては思い切った発言で、見方によれば昭和40年代、学園紛争の頃に叫ばれた「講座制打破」を既に先取りした意見かも知れない。

この初代所長の考えがその後40年の間にどれ程、実行されたか、それとも実行されなかったか。もし実行されなかった、或は不十分にしか実行できなかったとすればその原因は奈辺にあるか。これは曾つて研究所に席を置いた者は勿論、現に席を置く者も共に考えるべき問題であろう。

当時の医学生が結核に強い関心をもっていたことは前述の通りであるが、加うるに先輩の松田道雄氏（昭和7年卒）が「結核」という好著を出され、それが広く読まれた事もこの傾向に

拍車をかけた事実を記しておかねばならない。

4回生の有志十数名は集まって Ickert の Allergie und Tuberkulose という本の輪読会を夕食後、芝蘭会の図書室（今はもうなくなったが、医学部事務室の背後にあった）の薄暗い電灯をかこんで行っていた。

その中、暑中休暇になると、仲間のうちの数名は福井県の機業地帯に女工さん達の集団検診に出かけて行ったりした。ところが、彼女達に反戦思想やマルキシズムをふき込んだとかで（真偽の程は知らない）、当局の憎むところとなり、卒業後、陸海軍の軍医中尉として任官していた級友たちが軍法会議にかけられて、降等、位階剥奪されて一兵士として戦地に赴いたり、剥奪はされない迄も左遷されて最も危険な任務に就いた者もあった。

彼等の大多数の者の動機が、機業地帯の結核（当時、最もその浸淫の度が甚しいとされていた）をもっとよく知ろうという単純なものであったことを知るだけに、彼等の心中を思うと今でも涙なきを得ないのである。

一方、筆者はと言えば、何れ、医者になるとしたら何科を専攻するにしても結核に関する基本的な智識と技術だけは身につけておきたいと思っていた。そこへ、同級のK君が、今度できた結核研究所の植田教授の処で、結核菌の培養の実習をして貰おうじゃないかと言われたのが、この研究所に入る端緒であった。夏休中、ともかく結核菌に関する実習と簡単な実験をやらせて頂いた。ところが今迄は、講義されたことを覚えるだけが仕事であったのが、研究とか実験とかは、ともかく create することである。何と面白いものであるかと、夢中になってしまったのである。

そしてその年の秋、11月16日に第6回の京大結核研究会に学生の身で発表することが許された訳である。当日発表の第一席で、身の引きしめる緊張感と、秋の朝の爽やかさとは今も忘れないが、それにも増して、当時は結核研究所の講演会と言えば、多分、学内で最大多数の聴衆を集めて居り、楽友会館2階の大会議室は立錐の余地もなく、窓際から入口まで多数の人が起立

したまま聴き入っていた。その中に小児科の初代の教授、平井毓太郎先生の御姿を何時も見かけたものである。唯、筆者は平井先生の講義を

一回も聞いた事がないのに、どうして平井先生だと分ったのか、これは今だに不思議である。

まえ かわ のぶ お
前 川 暢 夫 大正10年1月30日生



本籍地 兵庫県
現住所 兵庫県芦屋市松ノ内町2の21
(TEL0797-22-3906)
昭16年3月 第六高等学校理科乙類卒業
昭19年9月 京都帝国大学医学部医学科卒業
昭45年9月 京都大学教授(結核胸部疾患研究所) 就任
昭51年10月 京都大学結核胸部疾患研究所長併任(至昭55年10月)
昭51年10月 京都大学評議員併任(至昭55年10月)

研究所創立四十周年を迎えて

昭和16年に当時の国家的要請にもとづいて、京都大学に結核研究所が附置されてから丁度40年が経過した。私は、昭和51年秋から昭和55年秋まで4年間どうか大過なく所長を勤めさせて頂いたので、最も新しい前所長と言うことになるが、今回何か思い出なり感想なりを書くようにと求められたので、拙い筆をとる事にした。

歴代の所長を勤められた先生方が、夫々の思い出を書かれると思うので、私は自分が所長として勤めた間のことを中心に思い出すままに書いて見たい。

昭和19年9月に京大医学部を繰上げ卒業して以来、約38年間にわたって引続いてこの研究所に在籍しているので、私にとって研究所の生活は様々な思い出にみたまされている。私事にわたって恐縮であるが、昭和51年6月に日本結核化学療法研究会に出席のため上京していた時に、突然血尿をきたして急拠帰宅した。検査の結果は膀胱腫瘍ということで、身辺の整理を済ませ

て従弟の林威三雄博士の執刀による手術を受けた。多くの先輩、友人に心配を御掛けしたが、幸に良好な経過で9月には再び出勤出来るようになって拾い物のような命を是非大切にしたいと考えていた矢先に、教授会では上坂所長の任期満了にともなう後任の所長選考が行なわれた結果、私に所長を引受けるようにという事になった。病休直後の私にとって大変に酷な決定だと思ったが、職を辞する以外には断ることは出来ないという意見もあって10月から所長としての仕事を始めた。余り自信はなかったが、それでも4年間無事に、外国出張を除いて会議に代理出席を御願いすることなく任期を満了することが出来て、有難い事だと思っている。

其の間の出来事のうち強く印象に残っているものを思い出すままに拾って、私の責をはたしたいと考える。

所長になって数カ月を経た昭和52年の早春に、当時の岡本総長が評議会に対して昭和48年12月以来休止していた経済学部竹本信弘助手の分限処分に関する審議を再開したいと発言してから、

学内は俄かに騒然として来た。以後の評議会や部局長会議は転々と場所を移して学外で行なわれ、審査評議会が結着を見た7月まで京大構内は異常な空気に包まれていた。春のある日に京大本部前で先生に引率された小学生が写生をしている所を通りかかった時、本部建物を画いている画用紙の中の時計台の正面に「竹本処分粉砕」と苦勞して書きこんでいる子供達を見て、何とも言いようのない深い感慨を覚えたことであつた。

京大紛争の最終処理とも言うべき時期の評議会に、その一員として加わり種々の見解の交錯のなかに身を処する機会を得たことは誠に感銘が深い。

研究所内では永年にわたって概算要求を続けて来た附属病院の中央検査室の設置が認められ、それに伴って教官（助教授）1、技官2名の定員増を見るに到つたことが朗報であつた。次第に病院の機構が整備されて来ているのは喜ばしい。

研究所の将来計画に関しては基礎と臨床との差ばかりではなくて、研究者の年代層によっても相違があつて、教授会においても教官会議においても継続議題として採り上げて意見の集約につとめたが、残念ながら一定の見解を得るに到っていない。

最近の研究所の概算事項を見ても、部門新設

などの将来計画に基づいた要求よりは、手近な病院の増築や病院機構の整備の方に力点が置かれているようであるが、たとえば肺癌研究の基礎部門と臨床部門といった風に基礎系の研究を補完しながら臨床系にも弾力を与えるような概算要求を継続することが、現在の研究所として考えられる積極的な方向の一つではないかと思っている。

勿論、一方では果して今後とも「胸部疾患研究所」でよいのかという問もあるわけで、これに対しては基礎と臨床との別なく、すべての研究者の志向を大局的に集約して結論を出した上、少なくとも十年間位は迷わずに各人の力を傾注する決意が必要であらう。

又、内外の研究者の交流を少しでも自由化するために、客員部門を設けることも意義の大きいことだと考える。

ともかく、この狭い研究所のなかで基礎部門では医学・生物学研究所を目指し、臨床部門では胸部疾患研究所を目標として進むというような分離志向を固定化することのないように願っている。

私自身は臨床家の1人として、研究領域としても診療単位としても呼吸器疾患に対するニードは決して小さくはないと感じているからである。

さ がわ いち ろう
佐 川 一 郎 明治40年3月1日生



本籍地 京都府
現住所 京都市左京区吉田中大路町31
(TEL075-751-0015)
昭2年3月 第三高等学校卒業
昭6年3月 京都帝国大学医学部医学科卒業
昭29年11月 京都大学教授(結核研究所)就任
昭33年9月 金沢大学医学部教授就任
昭47年3月 停年退官

旧結研の去年・今年

結研創立40周年を迎えることができ、およろこび申し上げます。この機会に創立当時の状況を述べ記録に残しておくのも無意味ではないでしょう。

昭和16年3月に官制が公布され発足したのですが当時は結核予防会所属の結研があるだけで国立のものは一つもなかったのであります。結核は国民死因の第一位を占め健民政策の上からも結核の予防とか治療が切実に要求されていました。京大はそれまで結核に比較的冷淡であり、また関心がうすかったのですが当時の星野教授、服部教授や宇多野療養所の三戸所長が中心になり当局に強力に陳情を繰り返され、あわや流産の憂き目にあおうとしましたが、やっと年度末ぎりぎりに金沢医大の結研と一緒に誕生したのでした。全くよく実現したものと関係者の努力に敬服しています。

当時の所員の顔触れは紹介するまでもありませんが成立当時は旧耳鼻科外来診療室とか医学部附属病院の旧病室を借用し、会計上は収入金

支弁という制約があり、そのため治療に重点がおかれ予防面には理解を得難かったことなど忘れられない思い出があります。

岩井教授は元来消化器病診断の熟練者でありましたが反転、献身的な診療を行われ収入面で寄与され、また長石助教授は耳鼻科専攻でしたが鮮やかに外科に転向され、青柳教授の庇護の下、才気溢れる外科療法を開発されたのは忘れることはできません。

その後化学療法の進歩により結核症は激減し国立の結核療養所は相ついで看板を塗りかえ、研究上魅力が乏しくなり、本学の結研も名称を変更されたのでしよう。

今後研究所はどのように進むべきでしょうか、色々の考え方があると思いますが、医学部附属病院の分院化に墮することなく、大学付置研究所としての特色を生かし広く門戸を開放し人材を求め、あくまで専門に徹し、実力をつけることが大をなす道ではないかと考えています。

研究所各位のご精進を祈るや切なるものがあります。